
あなたのための幸せ屋

ヒトリネコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたのための幸せ屋

【著者名】

N1199D

【作者名】 ヒトリネコ

【あらすじ】

ここは“あなたのための幸せ屋”。ここでは、あなたのための幸せを売っています。しかし、お金ではお売りすることはできません。今まで良い事をしてきても、報われなかつた方ががたくさんいると思います。ここでは、今までしてきた良い事の回数や価値で幸せを売っています。これは、友達のいない少年が、このお店を見つけてから、幸せが何かを知るまでの成長ストーリーです。

(前書き)

ヒトコです。

ここには初投稿の作品です。

正直、読んで意味がわからなくなると思いますが、暖かい眼差しで見てみてください。

（一日目）

僕は友達が全然いない・・・。
だから、いつも暇なんだ・・・。

僕は散歩をしていた。

特に、向かつてゐる所はないけど、適当に歩き続けていた。
いつも同じ道をいつも同じ時間に・・・。
そして、いつも同じ光景を見ている。

「・・・ん？あの店は何だろう？」

僕は、見たこともない店を一軒見つけた。

「あなたのための幸せ屋」

「あなたの幸せお売りいたします。」

意味がわからなかつた。

「でも、本当に幸せがもらえたらいいのにな・・・。
僕はお金を持っていなかつたから、見るだけと思い、店に入つてい
つた。

カラソカラソ・・・。

扉を開くと、店の中は普通の店だつた。

でも、売り物が決まっておらず、本、花、家具、ゲーム、服、おも
ちゃ、など・・・いろいろあつた。

“いらっしゃいませ”

その中に一人、女の子がいた。

「あの。幸せを売つてゐるという看板を見たんですけど・・・。」

僕が尋ねると、お店の子は僕の顔をじいっと見つめた。

「あの・・・僕の顔に何かついてますか？」

“あなたは幸せを買いにきたんですか？”

お店の子は無表情のまま、質問をしてきた。

“いえ。僕はお金を持ってきてないんで・・・”

“私は買いにきたのかどうかを聞いたんですけど、わかりませんで
した？”

「・・・」

“ちなみにここは、お金では何も買えません”

僕はそのお店の子が言つてる意味がよくわからなかつた。

“ここでは今までしてきた良い事の回数や価値で幸せを買うことができる
できます”

「じゃあ、僕はここで幸せを買うことができるんですねか？」

“まだ足りません”

僕はちよつとがっかりした。

でも、その前に疑問をひとつ思ひ出した。

“あと、幸せを売るつていうのはどういう意味ですか？”

“それを知りたいのであれば、良い事をしていつて、直接幸せを買
つてみてはどうですか？”

要するに僕は今日、できることはない・・・。

「家に帰つて、お母さんのいろんな手伝いでもしてみるか・・・。

僕は、最後にお店の子にお礼を言つて家に帰つていった。

（2日目）

僕は、今日もまた放課後にあのお店に行つた。

昨日はいろんな手伝いとかしたから、もしかしたら買えるかもしれ
ない。

すると、今日は一人お客様が来ていた。

“あなたの幸せはなんですか？”

「えっと・・・わ・・・私は・・・その・・・彼と・・・またやり直したいんです・・・。」

“あなたは、その幸せを叶えるだけの良い事をしてきていたりするよね”

お店の子がそう言つて、お客の女性の顔をじっとその子は見つめていた。

「・・・どうなるんだろう・・・。」

僕がそう思つて見ていると、一人の男が入ってきて、急にお客の女性に謝りだした。

「あの時はゴメンー！また、やり直してくれないか？』

その女性が頷くと、その男性はお客の女性を抱きしめました。

“お幸せに・・・”

「あ、ありがとうございました。』

お客様の女性が、深くお辞儀をすると、一人とも、手をつなぎながら満足そうに帰つていった。

僕には、一体何が起きたのか、さっぱりわからなかつた。入り口で僕はずつと考えていたら、声をかけられてしまった。

“そんな所におらず、どうぞ中に入つてください”

「あ！す・・・すいません！！」

僕は、いきなり声をかけられ、驚いてしまい、かなり動搖してしまつた・・・。

僕は店内に入り、昨日いろいろと手伝い等をしたので、幸せを買えるか聞いてみた。

“足りません”

また言わってしまった。良い事を嫌になるほどやつたのに・・・どうすればいいんだろう？

僕はしばらくお店でお客さんを見たりして、どうすればいいか考えることにした。

「うへへん・・・。」

ずっと考えていた・・・。すると、また一人お客がやってきた。

「おこーし、幸せ売つてるんだよな？俺に売つて、警察の手から逃してくれ！いくらだ！？」

“お金では売つております”

「何でもいいから、売つてくれ！」

“売れません”

「何でだよー？ふざけんなよー！」

売れない、と言われたら、そのお客様がものすげにキレて、お店の子の胸倉をつかんだ。

“・・・”

お店の子は、ものすげくそのお客様をにじりこんでいました。すると、急にお店に警察が入ってきた。

「動くな！お前を逮捕する！…」

「な、何で俺がここにいることがバレたんだ！？・・・くせつ・・・」

男はおとなしく警察に捕まり、パトカーに乗つていった・・・。

何が起きたのか、更にわからなくなつた。

僕は考えた。

そういうえば・・・何か起きる前に、かなりず誰かが、そのお店の子に見つめられている。

彼女は一体何者なんだろう・・・。

と、考へている間に夕方になつてしまつた。

今日も家に帰つたら、お母さんに喜んでもらえるようにがんばろう。

そして、僕は考えながら家に帰つていつた。

（3日目）

僕は、今日もまた放課後にあるお店に行つた。

でも、今日はいつも違つて、とても機嫌がよかつた。

なぜなら、僕は昨日、こつそり家の掃除をしたら、お母さんに「ありがとうね。」と、喜んでもらえて少し嬉しかったからだ。

「ここにちはー！」

“いらっしゃいます”

なんか今日は、すげくワクワクした感じだった。

「あの。今日は僕、幸せ買えますか？」

すると、お店の子は僕の顔をじいっと見つめてきた。

・・・ドキドキドキドキ・・・。

“買ふことはできます”

・・・モ・・・マジカよー！

「僕の幸せって、ど、どんなものですか？」

“あなたのほしい物を一つ、ここでさしあげられます”

やつた！僕はここで、初めて買い物ができたーー！

「じゃあそれをください！」

“わかりました”

お店の子は僕の手をじいっと見つめました。

・・・しばりくしたが、何も起きない・・・。

“ありがとうございました”

「えー？ちょっと待つてください。何ももらっていないませんが・・・。

僕は質問したが、お店の子は少し微笑みかけるだけで、何も答えない。

まったくもって、意味がわからない。
僕は、少し機嫌を損ねた。

せっかく良い事をして、お母さんにほめられて、幸せを買えるつ
てきたから最高だったのに、何も起きてないのでショックはかなり大
きかった。

・・・今思つと、僕がほしい物つてなんだろう・・・？

まさか・・・それがわかつてからもらえるつてことなのかな・・・。

ハア・・・また面倒がひとつ増えちゃった。

でも、まあそれがわかつた時の、嬉しさもまた多分格別だらうな。

今日はもう、そろそろ帰るかな。

「ありがとうございました・・・。」

“ またのご来店お待ちしております”

僕は、家に帰ることにした。

家に帰っている途中、僕は子供が公園で、鬼ごっこをして遊んでるのを見かけた。

それは、「普通のことなのに、僕にとっては、とても印象が強いものだった・・・。

～4日目～

僕は、今日もまた放課後にあのお店に行った。

結局、僕のほしい物が何なのかわからなかつた。

今日、僕はあのお店の子から、ヒントみたいのを聞き出せりとしていた。

そして、お店にさき、中に入ると、今日も先客がいました。

そのお客様は、僕と同じ年くらいで、男の子でした。

「えへっと・・・その・・・。」

その男の子は、お店の子の態度に困つてこらみつだつた。

「う～ん・・・。」

僕は気になつて、彼に尋ねた。

「どうかしたの？」

「あの・・・。この子、何も言つてくれなくて・・・。その・・・。」

やつぱり・・・。このお店の子は、接客態度をビリにかしたほうが多いと思つただけだな・・・。

「大丈夫。“ 幸せ買えますか” って言えば、反応してくれるから。多分・・・。」

「あ、ありがとうございます。」

その男の子は、僕に続いて、お店の子に質問したら、答えてくれた。

“お売りいたします”

「え～っと……あの～……僕の幸せって何?」

「僕もわからないよ。昨日、僕も買つたんだけれど、何も起きなくて、

困つてゐるんだ。」

「じゃあ……買います!」

すると、お店の子は僕と同様に、彼をじいっと見つめだしました。

もちろん、僕と同様で、何も起きない……。

“ありがとうございます。”

「え～っと……何がですか?」

“・・・”

答えない。僕とまったく同じような感じだった。が、お店の子が一言、言った。

“あなたは、もうすぐ手に入るでしょう”

・・・何で僕と違うんだろう?

「あ、そうですか。こちらこそ、ありがとうございます。」

「あの、すいません。何で僕は、すぐに手に入らなかつたんですか?」

僕が質問したら、意外な答えが戻つてきた。

“あなたも、もうすぐ手に入るからです”

・・・分けがわからぬ……。

店の外に出ると、さつきの彼が僕に話しかけてきた。

「あの・・・さつきはありがとうございます。」

「いや、いいよ。気にしないで。」

僕は、あまり同じ年くらいの人にお礼を言われたことなんて、あまり無かつたから、少し照れくさかつた。

「あ、あの・・・え～っと……。」

彼は、何かもじもじしていた。

「ん?どうしたの?」

「あの・・・と、と、友達になりませんか?」

意を決したみたいに、僕に言つた。

「僕も、友達がいなかつたから、とてもうれしかつた。
でも、それと同時に不安も、よぎつた。」

「僕なんかでいいの？あとで、損するかもよ……。
すると、彼は万遍の笑みを浮かべて、こう言つてくれた。

「友達が増えて、損する事なんか、あるわけないよ……。
多少、言い切つた後、ちょっとぴり自信なさげになつたけど、その言葉は僕にとつて、胸にしみる言葉だつた。

「……ありがとう……。」

僕は、少し涙目になつてお礼を言つた。

「え～っと……明日つて土曜日だよね……？ここで待ち合わせて……また、ここでは会わない……？」

「うん。いいよ。」

「じゃ、じゃあ……今日は夕方だから……。帰るね……。」

そう言つと、彼は走つて帰つていつた。でも、最後に振り向いて、手を振つてくれた。

僕も彼に、手を振り返すと、彼は家へと帰つていつた。

・・・まさか・・・これが僕のほしい物・・・。

僕は、心中でそつと思うと、家へと走つて帰つていつた。
友達ができた最高の思い出と共に・・・。

（最終日）

僕は、僕の友達と昨日会つたお店の前に向かつた。

お店に向かつている途中も、ワクワクがあさまらなかつた。
どういう話をしようかな・・・？何して遊ぼうかな・・・？
考えるたびに、ワクワクが増していつた。
その分、走つている時間が、長く感じた。

お店に到着。だが、そこには思いもよらぬ光景が、見えた。

なんと・・・あつたはずの、あの“あなたのための幸せ屋”が、きれいで消えていた。

それを見た僕は、口をぽっかりと開けて、お店があつた空間を見ていた。

すると彼も、ようやくここに来た。

「や、やあ・・・。どうしたの・・・?」

僕は、空間を指差した。

「こ、ここのお店が・・・きれいに元無くなつてる・・・。」

「う、うん。」

一人して、考え出した・・・。

どうやって、お店は消えたのか・・・。なぜ、お店は消えたのか・・・。

そもそも、本当にここお店があつたのか・・・。

もしかしたら、僕が勝手につくつた想像だつたかも・・・。

でも、そうだつたら、僕たちは今、こうして出会えるはずが無い・・・。

うへん・・・。

二人とも頭を抱え込んでいた。

「なぜ、お店が消えたか・・・。それなら、わかるかもしれない・・・。」

彼は、独り言のように言った。

「僕も、最初はお店がここにあつたのに・・・。気づかなかつた・・・。」

「ど、思つていた・・・。」

「どういふこと?」

「でも・・・。もしかしたら・・・。気づかなかつたんじやなくて、最初から無かつたんじやないかな・・・?」

彼は、不思議なことを言つているが、結構、頭はいいらしい。

「そして・・・。なぜ最初は無かつたのに・・・。ここにあのお店が現れたか・・・。それは、僕たちがそれを望んだからだと・・・。思うよ・・・。」

「でも、それだとまるで、僕たちの心をわかっているようじゃないか。」

僕がそう言ひと、彼は即答してきた。

「実際・・・あのお店の子には・・・僕たちの心を見抜かれていたじゃないか・・・。」

ハツ！た、確かに・・・何かとお店の子は、僕たちのほしい物を見抜かれていた・・・。

そして、手に入つたら、お店は消えた・・・。

まさか・・・彼女は超能力者か何かなのか？

「・・・・」

二人とも、同じことを考えていたらしい。しばらく、沈黙が続いた。そして、僕が不安で逃げたいと思い、立ち上がった時・・・彼が口を開いた。

「何にしても・・・あのお店の子は・・・力を・・・報われなかつた人々のために・・・使ってくれていた・・・って事かな・・・。」

僕は、そういうえば、そういう場面に心当たりがあった。

犯罪者っぽい人が、罪をこまかそと、ここに来たとき、お店の子は、力を使ってその人を捕まえていた。

逆に、困っているお客様がいると、お店の子は、助けてくれていた・・・。

超能力者が危ないかどうかは、すべて心次第ってことだ・・・。

「僕たちも・・・助けられたね・・・。あのお店の子に・・・。」

「そうだね。」

「そして・・・幸せが手に入つたら・・・必要が無いから・・・お店は消えてしまつた・・・。」

「・・・・」

僕は今思つと、あのお店から、幸せだけじゃなくて、いろんなものをもらつた気がする。

努力しなきやいけないこと。

喜んでもらうことの大切さ。

そして、良い事をしたら必ず報われる。

あの店は、僕にとって、最高の教室で、
あの子は、僕にとって、最高の先生だった。

僕は、この5日間を、一生忘れません。

いろんなものを学び、いろんなものを得ました。

勉強なんかをしていても、学べないものを学びました。

これからも、良い事をして、報われて、笑つていける人生を送りたいです。

年組番城嶋竜人

おしまい

(後書き)

どうでしたか？

意外にも理解できたり、少しでも読んで良かったと思つてもうれ
ば、幸いです。

これからもいろいろと作品を残していくので、楽しめた方は、これ
からも是非読んでみてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1199d/>

あなたのための幸せ屋

2010年10月26日06時30分発行